

家康没後四百年、今改めて学ぶ  
「徳川二百年の基礎を築いた組織と管理」

講師 一龍齋貞花

二〇一五年は、一六一六年（元和二年）四月十七日、七五歳で亡くなった家康の没後四百年に当る。

静岡・浜松・岡崎と、ゆかりの地はすでに提携してアピール、観光客誘致、まちおこしである。

出世城といわれる浜松城には、私の講談ビデオが流れています。お蔭げさまで昨年から講演のご依頼を頂いており、愛知県西尾市では、徳川宗家とご同席させて頂いた。世が世であればお側にも上れない、「即答を許す」のお言葉がないにもかかわらず気楽に話しかけ汗顔のいたり、正にお手討ちものであります。

幼名を竹千代、三歳の時母お大の実家水野家を継いだ兄が織田に味方したため、今川を頼っていた父広忠はお大を離縁。お大は、織田の部将久松俊勝と再婚。

竹千代は六歳の時今川家の人質に、ところが、広忠が後妻に迎えた妻のところ、父田原城主戸田宗光は親織田派、今川へ向う途中だまされて熱田へ連れて行かれ、織田信秀に永楽銭百貫文で買われてしまった。

その後、今川が安祥城を攻撃し、信長の兄信広を降し、この信広と捕虜交換で竹千代は岡崎へ、二年二ヵ月で帰ったものの、すぐに今川家へ人質に。岡崎滞在はわずか十二日。

父広忠が暗殺され、主君となった竹千代は駿府に、この間、今川家から派遣された城代がすわり、領土は代官がきて管理し、所領から上る米は駿府へ運ばれていく。今川の植民地である。しかしそんな苦労の中でも、三河武士は武骨で頑固さで団結していた。主従の絆の強さといえましょう。

母お大は、我が子のため衣服や食べ物を送っている。

後年家康は、この母の実家水野家、再婚先の久松家を取り立て、人質時代暖く接してくれた大河内源三郎を優遇している。

ある年の端午の節句、安部川で子どもが二手に別れて石合戦、一方は三十人余り、一方は一四〇〜一五〇人とあつて優勢だったが、「小勢の方が勝ちじゃ」、家来が驚くと、「大勢は気のゆるみが出るが、小勢は必死になるからじゃ」。果せるかな盛り返し小勢の勝利。家来は流石と舌を巻いたと申します。

十四歳の時、義元のもとで元服し松平次郎三郎元信、義元の元の一字をおくられている。この間、義元の伯父で今川の執権職・参謀、禅僧太原雪斎に学び、経世（けいせい）・軍事の教しえを受けた。織田に囚われていた竹千代と人質交換を図った

のもこの雪斎である。

十六歳の時、義元の姪築山と強制的に政略結婚させられ、同年、四五歳上とも、十歳上の諸説があり、二人の間に信康と亀姫誕生。

桶狭間の合戦後、岡崎へ戻る

三年後の永禄三年、桶狭間で義元が信長に討たれるや、祖父以来の居城岡崎へ逃げ帰った。この時恐怖からふるえが止まらず大樹寺の和尚から、一喝されている。家康は信長と同盟を結んだため、今川の出である築山殿は面白くない。二人の仲は冷え切ってしまいます。

元信から家康と改名した二カ月後、家を二分した一向一揆勃発。家康の家来が本證寺（本宗寺）の？を馬蹄にかけて踏み荒したとか、謀反の疑いのある松平三蔵を上宮寺がかくまっていたとか、坂井正親が犯人逮捕のため本證寺へ踏み込んだ寺への侵入事件等から、「法敵家康を倒せ、進むは極楽浄土、退くは無限地獄、阿弥陀如来かご領主か」と門徒衆との宗

教戦争。外国では今も宗教争いから

の大々的な戦いが繰り広げられている。日本では、天草四郎の島原の乱が有名だがそれほど多くない。翌年平定、本多正信はじめ首謀者を罰しようとしたが、お大の方が仏の道を説いて説得し、家来、寺、僧侶の罪を許し、背後に今川の残党や、甲州武田の謀略があつたことも判明し、一揆に加担した者は後悔して前にも増して団結が固くなった。正信は浪人の後復帰し家康の腹臣になっている。「一筆啓上、おせん泣かすな、馬肥やせ」の正信である。

家康は「厭離穢土、欣求浄土」と書いた旗差物を翻して戦っているがこれは、煩惱にけがれた現世を嫌い離れ、極楽浄土に往生することを願うとい求める、つまりいつ死んでもいいと命がけて戦うということであろう。浄土宗で使われる言葉である。

#### 四度の大難

生涯四度の大難といわれるが

・織田に売られた時（六歳）

・三河一向一揆の時（二二歳）

・三方が原の大敗戦の時（三二歳）

・本能寺の変の時（四一歳）

人の人生には必ずといっていいほど危機や、節目がある。そこをどう切り抜けるか、簡単にバンザイするか。家康は、その都度切り抜け、次へのステップにしている。そうしたところから、

「人の一生は、重荷を背負うて坂道（遠き）道を行くが如し。急ぐべからず」と、言ったといわれるが、後年の創作ともいわれている。

危機をいかに堪えるか、苦しさ能耐え、我慢出来るか。言うは安し、行いは難しです。我慢に我慢を重ねて天下人となった家康の大なるところでは、

一向一揆を収めた三カ月後三河を統一し翌年、従五位下、三河守に任ぜられ、松平姓を徳川に改め、ここに徳川家康。二五歳の時である。

一般には「徳」と書くが、宗家は徳川とお書きです。

長男信康が、信長の長女徳姫と

結婚。家康は曳馬城（浜松）を攻略し遠江の大半を平定、さらに駿府城をも攻略し、元亀元年、岡崎城を信康に譲り、武士が馬を引くというのは縁起が悪いと、浜松と改めて入城。妻子と離れたことから後年、築山御前と優秀な長男信康を死に至らしめることになり、家康自身、一代の大難、一代の敗戦を切り抜け、出世への足掛りとした。「逆転の発想、浜松空城の討」は、次回のお楽しみ。ポポポン

